

○議長（川崎和夫君） 4番 森 弘秋君。

○4番（森 弘秋君） 傍聴者の皆さん、ご苦労さまでございます。

先日、NHKの「ためしてガッテン」の番組で、「認知症を予防せよ」の放映があった。中で、1分間で動物の種類、幾つ言えますか。紙に書いてくださいという質問です。12から13の動物を書くのが標準で、以下の方は認知度が進んでいるかな、どうなんでしょうかねと言っていました。

また、こんなショッキングなニュースが報道されていました。万引きの6割が高齢者で占めている。背景に孤独、経済不安があり、金に余裕があると思われる人の犯行が少なくない。社会的に孤立し、寂しさや不満を感じている人であるとのことです。

先ほど田村議員さんからも話がありましたけども、高齢者の交通事故が頻繁に起きています。身近な事故では、赤信号であったが、歩行者がいない。早く渡ろうとアクセルを踏む。そこに歩行者が横断、はねてしまった。いろんな事情もあるだろうが、もう少し心にゆとりを持ってないものだろうか。

さて、心にゆとりを持つためには、どうしたらいいのだろう。地域社会で遊び心の行事ができないものかと思います。

ところで、舟橋村で「富富富」の田植えが行われました。知事も出席して、GPS装置が搭載された田植え機で、手を上げてご機嫌でありました。私は本当、知事は幾つなんだろうかと。元気そのものです。

それでは、通告してあります、豊かで健康に生きる高齢者のための活気あふれる策について質問いたします。

まず、私のことでありますが、ちょっと恐縮でありますけども、老人クラブ「舟橋寿会」のお世話を、会長の職で4年間させていただきました。とにかく4年間、お金が少ない。規定どおりの予算のみであり、活動資金がないのであります。

他の町の団体等の実態を調査していただき、一度逆査定をしていただき、活動費としてそれ相当の金額、例えば30万円なり50万円の予算枠で交付できないものだろうか。その予算を固定費とし、以後活動費として交付する。そうすれば活動もやりやすくなる考えるのは、私だけではないと思います。条例を制定するかどうかは行政の判断であります。

立山町、上市町を調査しました。相当金額も聞いてまいりましたが、町の事情もありますから、ここでは細かいことは控えさせていただきます。

立山町は、単位老人クラブの活動実人数に対して定額を補助、行事等を実施した場合は、75歳以上の参加実人数に対して、まかない料として相当金額を補助している。さらに、老人クラブ連合会の行事があった場合にも補助をしている。

上市町では、同じく単位老人クラブの活動人数に対して、29人まで及び30人以上の2区分とし、これは月額相当額を補助し、さらに立山町と一緒に老人クラブ連合会にも相当の補助をしていると聞いております。

村当局に考えてもらいたいと思います。よろしく願いいたします。

さて、エイジレス社会、すなわち高齢化が進んでいます。富山県統計課の調査による平成29年10月1日現在の人口動態であります。65歳以上が総人口105万5,893人に対して33万450人です。率にして31.6%であります。

舟橋村は、3,001人に対して、65歳以上が617人、率にして20.6%であります。

ちなみに、立山町は31.7%であり、上市町は35.2%であります。約3人に1人が65歳以上となります。最も高いのは朝日町で42.9%でした。ざっくり言えば、2人に1人が65歳以上になる勘定になります。また、60歳以上の計算になりますと、富山県は6万6,682人が加わって39万7,132人となり、37.6%であります。

このままの推移でいきますと、約3人に1人が高齢者になり、舟橋村の場合、141人が加わり、60歳以上が758人となります。率にして25.3%になります。4人に1人が60歳以上の高齢者の方ということになります。

そんな中で、「ふなはしむら健康構想」では、こんなことを言っております。舟橋村は、交通の便もよく、緑も豊かで住みやすい環境です。そのため、現在の状態に満足している方も多く、また不満はあっても、それを行政に提案する方が多くはないのが実情であります。そして、この村は若い方も多く活気がありますが、20年後には、今の舟橋村の多くを占める生産年齢の方が定年退職期を迎えます。そのときに安心して老後を迎えられる村、また今の子どもたちやこれから舟橋村で生活する人たちが将来にわたり住み続けたいと思える村、こうした「住んでよかった」と思える村をみんなで力を合わせてつくっていくことが構想の意義であると言っています。

また、こんなことも言っております。適切な健康資源を十分に活用し、そして、何より地域での充実した居場所や役割を持つことができる。そんな健康な村を目指すと

ております。居場所と役割です。

健康構想の策定が平成25年3月ですから、既に5年が経過しております。また、ふなはしむら健康構想の中で、世界保健機関の定義で、「健康」とは「身体的・精神的及び社会的に良好な状態であって、単に病気でないとか、虚弱でないということではない」とあります。

私は、3月の議会で村長に、舟橋村の中長期ビジョンについて問いました。村長の答弁は、舟橋村総合計画、舟橋村健康構想等々の計画に位置づけられた施策を、既に実施した事業の検証をはじめ、年次計画に基づき実施していくと述べられております。また、それぞれの計画は、総合計画に位置づけられる施策を集中的に取り組んでいくとも言っておられます。子育て共助のまちづくり、裏を返せば、エイジレス社会に対しても施策を実施していくものと考えてもよいと考えます。

能書きなら誰でも言えます。本当にもうすぐエイジレス社会の到来です。

データは、平成27年と少し古いですが、舟橋村の人口ビジョンでは、7年後の平成37年には人口3,228人の推計です。単純に60歳以上の高齢者は816人となります。

統計的な予想数字ですから若干ずれがあると思いますが、ここで高齢者のためにそれでは何をなすべきか、ビジョンを考えてまいりたいというふうに思います。生涯現役とするならば何か手を打ち、元気の源を与えなければならない。びっくりするようなスポーツ大会、いや、何をしているのかなと思われるような、奇想天外なスポーツ大会等々です。舟橋村から発信しましょう。しかし、これを一人でやれと言われても、なかなかできない。したがって、グループ活動が大切であります。

ところで、高齢者の健康向上・維持のために、今舟橋村の社会福祉協議会では、年2回、高齢者を対象にしたスポーツ大会、そして異世代スポーツ大会が実施されております。

また、最近、百歳体操が各地で実施されております。私も何回か出席しました。これからも時間が合えば行いたいと思っております。当初は食わず嫌いをしておりましたが、いざ出席しますと、なかなかおもしろい。そして、足の運動になります。寿会でも、昨年の傘寿の会で経験をしました。ことしも実行されるそうです。

再度申します。総合計画に位置づけられる施策を集中的に取り組んでいく。子育て共助のまちづくり、裏を返せばエイジレス社会に対しても施策を実施していくものと考え

るが、いかがですか。

高齢者の諸行事について、上市町・立山町では、老人クラブ連合会が主催して実施。実績に基づき相応の補助金を交付しているとのことでもあります。

それでは、舟橋村の独創的な催し物は何を考えられるか。現在の住民運動会では、高齢者かどうかはわからないが、何となく高齢者のための種目、縄ない競争が組まれております。例えば、高齢者運動会、競技種目、10ないし12種目、午前中のみのみ大会。出場者は60歳以上を対象にした「60運動会」を実施。また、歩こう会を進化させるのも一つの方法であると思います。

昨日、敬老会がありました。93名の方が出席されたそうです。このように、敬老会ですから75歳以上ですか、今度、私が言っておるのは60歳以上の方の運動です。

さて、冒頭にも言いましたが、現代社会、認知症人口が、予備軍を含めると数百万人いるそうです。先日ちょっと話を聞いたんですが、200万人ぐらいおるそうであります。認知症にならないために、心も体も健康でありたいものです。孤独から紛れるために、あるいは孤独から解放されるために、健康構想でも言っておりますが、居場所が必要であると思います。

そんな中で、今寿会では、「青空ハウス」と称して旧ゲートボール部室で、月に数回、お母さん方の遊び会が実施されております。本当に頼もしい限りであります。主催者は、参加者は寿会の会員にこだわらないと言っておられます。

さらに本年は、ネンリンピックも富山県で開催されます。これを機会に高齢者に活気を与えましょう。高齢者も元気でおりましょう。

エイジレス社会が進む中で、豊かで健康に生きる高齢者のために、活気あふれる活動を、独自の巧みな策を考えていただきたい。

村長は、3月議会でも答弁されました。創意工夫に基づいた地域づくり、これに尽きる。地方の繁栄なくして国の繁栄なしとも言っておられました。「命かがやく 笑顔あふれる」、住みよさ日本一を目指す舟橋村です。

日本一面積の小さい舟橋村ならではの、地方創生、創意工夫に基づく魅力ある村の発展、そしてエイジレス社会、高齢者が夢を持てる時代。村として、舟橋村は高齢者に対してどのようにかかわっていくのか、どのようにかかわれるのか。

舟橋村は子育てに力が入っており脚光を浴びているが、高齢者は置き去りだとの話を聞きます。大げさかもしれませんが、今の時代を築いたのは高齢者であります。高齢者

に、今以上に行政の光が当たったビジョンを示していただきたいと思います。

終わります。

○議長（川崎和夫君） 生活環境課長 吉田昭博君。

○生活環境課長（吉田昭博君） 4番森議員の高齢者の生きがい対策についてのご質問にお答えいたします。

本村の高齢化率は、ことしの6月現在で18.8%、富山県平均は平成29年10月1日現在で31.6%であり、他の自治体に比べ非常に低い状態にありますが、平成25年度に実施いたしました本村独自の人口推計では、このまま何もしなければ、2040年の人口は2,058人となり、65歳以上の割合も29%と急激な高齢化の進展が予測されております。

また、平成23年度に実施いたしました「生活と暮らしの調査」では、新興住宅における居住者の地域信頼が年齢の上昇とともに低下していることから、村外から団地に転入された方など近隣に頼れる知人がいない高齢者も急増することが予測されております。

このことから、本村では、ソーシャルキャピタル（地域信頼）を高めることで、エイジレス世代が地域の中に居場所や役割を持てる環境づくりを進めております。

具体的には、退職前後の男性を対象に、富山大学の協力を得ましてケアウィル塾を開催し、現役後の生活プランづくりの支援を行っております。これまで10名以上の方が塾を卒業されており、昨年度には卒業生による交流会を開催し、お互いの生活プランの進捗状況について意見交換などを行っており、今年度も継続いたします。

また、昨年度から民生委員のサポートに任命された協力員の皆様と、地域のつながりづくりをテーマにワークショップを開催し、全国各地での事例調査から、自らの地域で何ができるか、そのプランづくりを進めているところでございます。

エイジレスが輝くまちづくりに重要なことは、行政が当該者の役割をつくることではなく、エイジレスの方々自身が地域に役割や居場所を見つけられることであり、私たち職員の役目は、その具現化に向けて伴走していくことであると考えております。

一方、本村には、老人クラブ、通称「舟橋寿会」、シルバー人材センター等、認知度の高いエイジレス世代の大きな受け皿があります。舟橋寿会は娯楽の集いの場として、またシルバー人材センターは就労の場として重要な役割を担っていただいておりますので、本村といたしましても、それぞれの活性化並びに基盤の拡大対応に支援をしま

りたいと考えております。

また、エイジレス団体への助成等につきましても、当該団体に助成することが団体の自主自立や活動の拡大につながることであれば、十分検討してまいります。しかし、団体がもっぱら助成金に依存し、団体を維持させるために支援するものではないことをご理解願います。

いずれにいたしましても、エイジレス世代の地域参入は、今後高齢者が急増すると予測されております本村では大変重要な課題であります。引き続き、日本一面積の小さな自治体であるからこそできる、お一人お一人に向き合い、きめ細やかな施策を展開してまいりますことを申し上げまして、答弁といたします。

○議長（川崎和夫君） 森 弘秋君。

○4番（森 弘秋君） 今ほど答弁、ありがとうございます。

2点ほどかな。

お金を云々と。老人会そのものは、それぞれやっぱり会費を集めておるわけです。そこで、その会費を上げろというのならば、こんな質問をせんがです。会費、なかなか上げられないという段階でありまして、会費ですと、もう入る金が決まっておると。足りないところを国なり県なりでもやっぱり補助をしておるんですよね。けども、それでも足りないというところから、年間一律何千円か何万円か何十万円かわかりませんが、そういったものをこれから新たに交付金として補助できないかというふうに、今までそう言っておるんです。

そういうことについて、全く村はその考えがないのか、あるいは全く前へ進まないのか。もう少しかみ砕いて話をしてもらいたいというふうに思います。

それから、居場所をつくるのは確かに会員かもしれない。けども、私はとやかくあまり言いませんけども、行政側として、なら、こういったこともいい方向、要するに高齢者の方が楽しく愉快に過ごせる。例えば半日でも一日でもいい。そういったものを行政主導で何かできないかと。それがやがて板につけば、老人会がやってもいいと。

そういうことで、まずその資金がないから何もできないということが一つ。

それから、行政が少し介入して、例えば寿会も前へ一歩歩み出すから、行政も2歩ほど引っ張ってもらえんかということをおっしゃっておるんです。そういう、単に、いや、あんたら、しっかりやれと。あんたらがやる気を出してやりゃいいんじゃないかということではなく、やはりちっちゃな舟橋村ですけども、そこらあたりは、最初に言いましたけ

ども、逆査定という手もありますから、そういったことから、逆査定はお金があるんですけども、逆に少しアドバイスといいますか、与えてもらえないかと。

そこらあたり、行政側がどんなふうに捉えるか、再度ひとつよろしくお願いします。

○議長（川崎和夫君） 生活環境課長 吉田昭博君。

○生活環境課長（吉田昭博君） 森議員さんの再質問の件なんですけれども、1つは、会費といいますか、助成金のお話だと思います。

ただ、私は、先ほど答弁いたしましたとおり、それが事業として大きな効果を生むものであれば大いに助成をしていくというふうに考えますけれども、団体を運営するための経費として会費を上げていくということは、その予算がなくなってきたときには継続できないということにもつながります。

したがって、会費があるから行動してもらおうということではなくて、こういったことをやりたい。それによってこんな成果を生みたい。そこを助成する助成金でなければ、助成金の意味がないと思います。

ですから、全く上げないということではなくて、そういったものがどうなればそうなるのかということをやっぱり一緒に考えていくというのは重要だと思います。

また、先ほど居場所をつくと申し上げたんですけれども、住民の方々の問題だから行政は何もしないということでは全くございません。我々もこういった勉強会、ワークショップの中では先駆的な事例をずっととってきてまして、そこにいる方々、集まっていた方々と、常にそれはどういうことなのか、ここだったらどういうふうにするのかという形で一緒に勉強会を開催しております。

先ほども申し上げましたように、伴走するということです。役所が全てを主導するというのではなくて、エイジレスの方々自身が、こういうことをやりたい。それを具現化するために我々はどうすればいいかということと一緒に考えるということをやっているということでご理解いただければと思います。

以上、答弁いたします。

○議長（川崎和夫君） 森 弘秋君。

○4番（森 弘秋君） やりたいことを言ってくれ。そうすれば予算を上げますよと。どうなんだろうかね。私自身が、やはり課長自身は、話をしたら、うん、やりたいことがあるんなら言ってくれと。予算を上げますよと言ってくれて、若干もらっておるんです、昨年一昨年ね。ですから、それはそれでいいんですが、そういうこと自身が慣

例化、通例化するならば、ああ、なるほど。こういう行事をするさかいに、むしろ逆に、その前にお金を上げましょうと。ただ単に、おっしゃったように、これをやるからくださいと。それはわかりますよ、理屈としてね。

だけでも、そういうことを昨年も一昨年も言ってやっておるから若干はいいんじゃないかということの、もう少し胸襟を開いて話し合いが要ると思いますが、よろしく願いしたいと。

それから、今の言葉で、寿会と伴走とありました。伴って走るかな、多分そんな意味だと思います。そうすれば、私たちが今伴走しましょうと。役場は、あくまで行政サイドが物をやるんじゃないと。それはおっしゃるとおり、わかります。

そういうとんちというのもの、やっぱり、例えば行政側から、いや他府県ではこうやっておると。どうだろうか。これからエイジレス社会だから、何とかして健康を保って長生きしようじゃないかと、こんな話。「ピンコロ」という言葉もありますけども、ともに頑張ろうというふうなことも、確かに役場自身がやっておられるかもしれんけども、私たちには何となく伝わってこないというふうに思いますので、その答弁、よろしくお願いします。

○議長（川崎和夫君） 生活環境課長 吉田昭博君。

○生活環境課長（吉田昭博君） ただいまの森議員からのご指摘事項なんですけれども、今村として伴走するというのがなかなか浸透しない。従来はやはり行政が主導でやるべきことを示して、それに従ってやっていただくという形だったんですけれども、近年といいますか、我々、2年、3年前から65歳以上の方々、エイジレスの方々の世帯を訪問しております。その中で、既存でやっているような組織に対する魅力等を聞いてまいりました。なかなか入りにくいと、そういうところがございます。やっぱり受け皿として整備していくためには、ある程度の自主性、こういったものをやりたいというものがみつからないと、なかなか継続もしませんし、新しい人も入ってこないというのが現状みたいです。

ですから、既存は既存の組織として充実していくことも重要ですし、また団地の中には多くのエイジレス期の方々がこの後増えてまいります。そういった方々がどういう環境なら入ってくるのか。そういったことも私らはやっぱり考えていかなければいけない。

その中で多く、先ほど言われましたけれども、いろんな全国での事例があります。ただ、土地柄が違いますので、その事例がそのまま舟橋村で使えるわけではございません。



したがって、舟橋の場合はどうだろうかということ住民の方々と今ワークショップをしながら、そういうつながりをどうつくっていかうかというところに取り組んでいるところでございます。

この取り組みは非常に地道なもので、地味で時間がかかることなんですけれども、急激に大きく展開するということはなかなかできません。地道にこの作業を続けながら、少しでもエイジレスの方々が地域に参入しやすい環境をつくりたいというふうに考えております。

また、費用につきましても、再三再四申し上げますが、その事業費を補助することによって、それが成果をきちっと生めるような事業であれば、そこに対して助成するべきだと思います。また、その方法につきましても、一緒に検討していきたいというふうに思っておりますので、やりたいことを見つけなさいという、突き放す、そういうつもりは全くございません。あくまでも一緒に考えていきたいと、そういう姿勢でいるということをお願いしまして、答弁とさせていただきます。